

## 男子バスケットボール部

部長 櫻庭 景植  
 監督 竹内 敏康  
 コーチ 中嶽 誠

## 1. はじめに

2010年第86回関東大学バスケットボールリーグ戦より以下の通りにリーグ編成の改正が施行された。

- 1部 8チーム → 10チーム
- 2部 8チーム → 10チーム
- 3部 AB16チーム → 12チーム

そして、関東大学バスケットボール連盟は、1部2部を強化対象チームとし、3部を準強化対象チームと位置付けた。

このリーグ編成の改正は、強化対象を絞り込み、強化対象チームの試合数を増やして、大学バスケットボール界の強化・発展を目指すことを目的としている。

これに伴い、1部・2部間及び2部・3部間入れ替え戦を上位・下位3チームでの3本勝負(2戦先勝)方式で行うこととなった。

1部2部リーグ戦の競技方法は、10チームによる2回戦総当たり制である。このリーグ編成改正は、試合期間が2ヶ月(9週間)に及ぶものであり、選手層の厚さ・フィジカルの強さ・体調管理・結束力などが非常に勝敗に左右されると予想された。

また、本年度は竹内敏康監督が退官される年であり、バスケットボール部においては「節目の年」と位置付け、選手の喚起を促した。

## 2. 今年度の取り組みの中から

～ツープラトンシステム～

長期間にわたるリーグ戦に改編されたことを見据え、「選手層の厚み」という課題に取り組んだ。

まず、4年生を中心にミーティングを繰り返し、現状を把握した。具体的に2009年度リーグ戦選手場時間を見ると、1試合40分×15試合＝合計600分の中で、200分以上出場し

た選手は、1年生2人、2年生1人、3年生3人、4年生1人。また、その中でも190センチ以上の長身者は4年生が1名、2年生が1名しかいない。選手層の薄さが浮き彫りとなった。ルーキー(新入生)への期待もあったが、上級生となる選手への自覚とを求めることとした。

そして、ミーティングの中で考案したのが、「ツープラトンシステム」の導入。5人1チームで行われるバスケットボールのゲームにおいて、あらかじめ2チームを用意しておく。つまり同じチームでありながら2チームをつくり、時間や場面によって交替を繰り返す。バスケットボールでは時間が止まれば交替が何度でも可能なので、このルールをうまく利用した戦術と言える。

このシステム導入により、最低10人はレギュラーメンバーとして自覚が生まれ、ゲームへの貢献意欲も湧き、選手層の厚みに繋がることができると考えた。また、2チームで違う特徴を持たせると、相手に対して戦術的にも体力的にもプレッシャーをかけ続けることが可能になる。

具体的には、「5分間」を1チームずつが責任を持ち、相手にフィジカル面でプレッシャーをかけ続けることを追求した。そのために、練習メニューを5分刻みにしたり、5分間ゲームを多く取り入れたり、短い時間を集中して練習するよう心がけた。

戦術的にはオールコートバスケットを展開し、2チームで違うゾーンプレスを用意するなどディフェンスシステムの変化を強調した。オフェンス面では、速攻やアーリーオフェンスを中心にシュート数を増やし、その精度を高める練習に取り組んだ。

チームを分けるに当たっては、4年生のキャプテンと副キャプテンをそれぞれのチームに配置し、リーダーシップを発揮させた。戦術も彼らを中心に考えさせ、チームメイトがアイディアを出せるようにミーティングを増やした。

課題練習内容もチームごとで取り組み、非常に主体的な練習を実践することができた。

### 3. 反省

当初、ツープラトンシステムの導入でチームはスタートしたものの、5月の関東選手権ではベスト16にとどまった。完全に5人のチームを2チームづくり、時間に応じて交替させる戦術をとった。しかし、ツープラトンシステムに疑問が生まれ、1シーズン通して継続することができなかった。

その理由としては、ゲームの出だしの悪さがあげられる。ベストメンバーでスタートを戦った方がいいのではないかという考え方が出てきた。また、190センチの長身ルーキー3名が入学し、チームの主力として期待された。ツープラトンシステムの考え方が浸透できないままに、ルーキーへの期待が膨らみ、積み上げてきたチームの共通理解や方針を徹底できなかった。ここが大きな反省点である。

結果として9月からのリーグ戦においては、6勝12敗で10チーム中第8位。3部との入れ替え戦となり、辛うじて残留となった。

しかしながら、スタッツ(記録の統計)に目を向けると、個人タイトルにおいて、1年生・鈴山高範がスリーポイント王(62本31%)を受賞。第2位の選手に19本の差をつけていた。4年生・八木昌幸はアシスト部門3位(60本)、3年生・趙明がリバウンド部門3位(228本)・得点部門6位(341点)の個人記録を残した。

このことから、オフェンス面ではガード・フォワード・センターに軸ができていたので、多様な戦術理解が必要不可欠な課題と言える。

また、スティール部門で趙明が7位(27本)、ブロックショット部門で鈴山が6位(13本)であり、ディフェンス面の個人記録も残している。この二人を軸としたチームデ

ィフェンスの戦術にも目を向ける必要がある。

そして、試合出場時間では、200分以上出場した選手が4年生3人、3年生1人、2年生3人、1年生2人と合計9人となり、昨年度より出場時間の多い選手が増えた。ツープラトンシステムは継続できなかったが、与えられた時間に結果を出そうとする姿勢が随所に見られた。この点においては、当初取り組んだ「選手層の厚み」という課題の成果は現れたと考える。今後、ツープラトンシステムを体系化し、順大独自の戦術として構築していきたい。

### 4. まとめ

2008年に2部復帰してから3年、竹内監督勇退というバスケットボール部の節目の年であったが、1部昇格は叶わなかった。非常に残念であったが、長丁場であるリーグ戦を多くの選手が経験できた。

また、レベルの低い話ではあるが、3部との入れ替え戦では最終戦までもつれたものの、最後はチームが一丸となって2部残留を決めた。その中で、特に4年生・八木(主将)が足を痛めながらも相手に立ち向かう気迫を見せた。これは、チーム内はもちろん、応援に来て下さった方々にも大きな感動を与えてくれた。「チーム一体感」を求め続けた主将の魂は下級生にも伝わったと確信している。

総括すると、主力選手が少しずつ増え、大きな怪我もなくシーズンを戦うことができた。これは毎年重視している体調管理やフィジカルトレーニングへの地道な取り組みの成果であろう。継続してフィジカルを強化するとともに、戦術の共通理解を徹底し、一丸となって結果を出すチームへと変身していきたい。

### 参考文献

- 1) 関東大学バスケットボール連盟公式サイト <http://www.kcbbf.jp/>